

# 新岡垣風土記

第461回

## 海老津の廃寺と手野の富豪

岡垣歴史文化研究会 羽山 健一

むかし海老津の宝地区に照安寺というお寺があったが、江戸時代初期の火災で焼失し、鞍手町木月に移転して再建された。

寛政11(1799)年に完成した『筑前国続風土記附録』の海老津村の項に「村中に寺屋敷といふ所あり。鞍手郡木月村照安寺ノもとありし地也といふ。」とある。また、木月村照安寺の項に「松月山と号す。西本願寺に属す。昔ハ海老津村に有り。其頃ハ禅宗にて須藤行重といふ者開基の寺なりしとぞ。寛永七年改宗せり。此年本山より木仏寺号を免さる。承応二年寺を此村に移せりとん。」と記している。照安寺の開基が須藤行重で、鞍手郡木月村への移転を承応2(1653)年としている。開基は、経済的支援者のことである。

『鞍手町誌』民俗・宗教編は、照安寺の由緒を「その昔、遠賀郡海老津浜で漁師の網に一体の仏像が

かかった。人々は小庵を結び、この仏像を安置して尊崇した。これが照安寺の基になったと伝えられる。当初は禅宗であったが、江戸時代初期の住職須藤正雪(後の了善)が深く浄土真宗に帰依し、寛永七年(一六三〇)京都本願寺十一代法主準如上人より照安寺の寺号を認可され、浄土真宗本願寺派末寺となった。正雪は広く木月の地まで教線をのびし御座を開いた。承応二年(一六五三)正雪に帰依した木月の豪農安本善右衛門は、照安寺の木月移転を願いムラ人と相談の上、ムラ中すべて門徒になることで照安寺勧請を果たした。山号も松月山から木月山と改めた。海老津の寺跡は、照安寺屋敷や仏山という字名として今も残り、照安寺門徒も点在している。」と記している。

海老津照安寺のあった所は、宝地区を通る県道の丁字路付近と推

定される。集落前の道路は、明治23(1890)年開通の九州鉄道の線路敷の一部である。その横にはJR鹿児島本線が通り、周辺の地形は激変し、お寺の痕跡は皆無である(地図参照)。

海老津の照安寺を開基した須藤行重は何者であろうか。『福岡県地理全誌』や『古月村誌』は、木月村移転時の住職正雪を須藤行重としているが、誤りであろう。私は、須藤行重は手野の富豪須藤駿河守行重だと思っている。

須藤駿河守行重は、文明12(1480)年に宗像市鐘崎の織幡神社に歡喜天懸仏(御正体)を寄進している。御正体の裏面に「文明十二年庚子十一月廿八日大吉日 奉勸請南無祥天 須藤駿河守行重」と刻銘されている。また、延徳3(1491)年には高倉神社に毘沙門天立像を寄進している。立像の背面に「延徳三天辛亥三月吉日 願主須藤駿河守行重 并氏女 大工大江貞盛 小工各々」と刻まれている。この他、内浦の海蔵寺や遠賀町松の本の地藏堂を再興したと伝えている。さらには、大正14(1925)年に駿河守の屋敷跡とされる手野区の花田さんのお屋敷から大甕が5個発見された。大甕には中国銭

が詰まっております、大量の銭は吠で14俵もあったそうである。中国銭は、当時の我が国の流通銭である。以上が須藤駿河守行重の活動記録のすべてで、古文書類は一通も見られていない。まさに謎の大富豪で、手野区では駿河守を「道満さま」と称し多数の民話や逸話を伝承しているのである。

海老津の照安寺は、須藤駿河守行重の豊富な財力で創建されたのであろう。



海老津照安寺の推定地

【お知らせ】新岡垣風土記は、筆者の皆さまのご意向により、令和6年4月号をもって連載を終了することになりました。長期にわたりご愛読いただき、ありがとうございました。